

ご挨拶

令和6年1月1日に発生した石川県能登半島地震により、犠牲となられた方々に哀悼の意を表し、被災されたすべての皆様に心よりお見舞い申し上げます。また、被災地域の皆様の安全を心よりお祈り申し上げます。奥能登では、数多くの家屋が倒壊し、機能がマヒ寸前に陥った病院では、被災者である医療スタッフが懸命に人命救助に尽力されました。直ちに、全国より様々な職種の災害支援チームが派遣され、2月5日現在も多くのご支援をいただいております。少しでも早く、被災地の皆様が普段の生活に戻るためには、今後も継続的な支援が必要であり、そのためには、我々石川県民の地域の力も益々重要になってまいります。

このような災害下で、金沢大学子どもこころの発達研究センターがなすべきことを検討してまいりました。令和6年3月19日（火）から3月20日（水）の2日間、金沢大学宝町地区キャンパスおよび石川県立図書館にて、第5回金沢大学子どもこころサミットを開催する運びとなりました。学術や教育に関する発表のみならず、震災後のこころの健康をテーマにした市民公開の講演会を開催することにより、少しでも子供たちのこころの支援の一助になればと考えております。3月20日県立図書館においては市民公開で開催します。午前中のプログラムにおいては、東日本大震災において子どもたちの心理的な支援を継続してきた辻井正次先生（中京大学）をお呼びして「災害と子どもこころのケア」について講演いただきます。また、政府内閣府がすすめるプログラムのディレクターであり、浄土真宗の住職でもある熊谷誠慈先生（京都大学）からは、子どもたちが楽しく安らかに暮らせる未来社会について講演いただきます。そして、避難所生活のストレスコントロールにおいて大事なことは、規則正しい日常生活のリズムを取り戻すことですが、生活リズムについて生物学者の視点から日本を代表する脳科学者である内匠透先生（神戸大学）よりご講演いただきます。同日3月20日午後からはシンポジウム「学校×サイエンスの新展開」と銘打って、加賀市で先進的な授業を展開している加賀市の島谷千春教育長、「心の哲学」を専門とされる原塑先生（東北大学）他、県内外の教育関係者が集まり、これからの子どもたちの教育の在り方について、そして教育現場での研究の在り方についてなど議論いただきます。

子どもこころの発達研究センターは設立以来16年が経過しました。当センターは6年前の再編により「文理融合・地域支援部門」、「基礎・橋渡し研究部門」、「臨床・社会実装研究部門」の3部門で構成されています。文理融合・地域支援部門は教育委員会と連携しながら、子どもこころの諸問題への取り組みを議論し、科学的根拠のある支援プログラム、教員研修プログラムの開発を目指しています。基礎・橋渡し研究部門では、子どもの脳とこころの発達のメカニズムを神経内分泌学的側面から解明を目指しています。臨床・社会実装研究部は脳機能測定装置を用いて子どもの個性の評価支援システムを開発しています。今回のサミットには、これら3部門の研究成果も紹介します。市民の皆さん、関係機関の皆さんにご参会いただき、震災後の子どもこころの支援に関連して、様々な社会的課題（倫理的・法的・社会的）についても議論ができましたら幸いに存じます。

第5回金沢大学子どもこころサミット
実行委員長 菊 知 充